

ばならない。これは編集担当者のジレンマである。

解決法を示すのは難しいが、たとえば、各章のタイトルを統一させるのもひとつの方法だろう。第1章や第6章、第7章のタイトルが語りを引用しているように、他の章も同様に、第4章「本当のシャトッパは漢族だった!」、第5章「何族のものということはない」、第8章「やっぱり上海に帰りたい!」のようにしてもよかつたのではないだろうか。

長岡 慶. 『病いと薬のコスモロジー—ヒマラヤ東部タワンにおけるチベット医学, 憑依, 妖術の民族誌』春風社, 2021年, 399 p.

鈴木正崇\*

本書は、東ヒマラヤのタワンに居住するモンパと呼ばれる民族集団の人々が、病気の文脈を通して、チベット医学の専門家や村の伝統的治療者、施薬師、僧侶などとのようにつながり、薬や道具、神霊を媒介にして、病気の世界と自らの身体を連動させて生きていくかという実態を描く民族誌である。生活者の視点から現代における伝統医療の変貌を考察し、人々が経験する「病い」の意味付けや医療実践を幅広く論じている。フィールドワークは2010年から2016年まで断続的に行なわれ、言語はチベット語とヒンディー語に、日常会話としてタワン・モンパ語を使用

している。

タワンは、北東インドのアルナーチャル・プラデーシュ州のタワン県に属し、中国との国境紛争地帯で、外国人だけでなくインドの人々の入域も制限される、著者も1ヵ月の入域許可証を現地で1ヵ月ごとに更新して調査を継続したという。調査の難しい地域での堅実なフィールドワークに基づく本格的な医療人類学の研究として評価したい。広義のチベット医学の医療実践を扱う必要性から、調査地はタワンに限定されず、ダラムサラ、サルナート、ダージリンなどを含むマルチサイト・エスノグラフィーの性格を帯びる。

構成は以下のとおりである。

#### 序章

#### 第I部 チベット医学の開発

##### 第1章 チベット医学の制度化とアムチ

##### 第2章 チベット薬の標準化とタワンの人々

#### 第II部 ナツァの病いとチベット医学の実践

##### 第3章 タワンの暮らしとナツァの治療

##### 第4章 チベット医学の診療実践

#### 第III部 神霊と妖術における病いと薬

##### 第5章 神霊ルーによる病いと開発

##### 第6章 憑依と宗教薬

##### 第7章 毒盛りの妖術と民間薬

#### 終章

第I部では、チベット医学の制度化がインドでどのように展開したかという歴史的な脈絡と、制度化されたチベット医学とタワンの

\* 慶應義塾大学名誉教授

人々との繋がり過程を論じる。タウンではアムチは近年まで身近な存在ではなくローカルな家系もなかった (p. 96) という。変化の実態が焦点となる。第1章では、チベット医学を、古代の『ギューシ』以来の歴史的展開として概観した後に、チベット難民の流入以後、インドでチベット医学が新たに伝統医療の開発の文脈に置き換えられ、ソワリグパの名のもとに統合され制度化された状況を述べ、専門組織 (メンツィカン)、医療専門家 (アムチ)、社会活動家の間での対立と交渉を明らかにする。第2章は、チベット薬がアムチを介して標準化 (standardization) され大量生産に展開した過程を辿り、人とモノのネットワークや協働の多様性を論じる。標準化とは生産において原料や機械設備、作業方法、業務手続などを一定の基準に統一して規格化し、生産の効率化や合理化を図ることである。タウンに制度化されたチベット医学が流入すると、アムチが薬草採集に乗り出して協働で開発する動きが生じた。さまざまな担い手の相互交渉をアクターネットワーク論、薬草をバウンダリーオブジェクト論で論じ、民衆が制度を支えるアクターとなる過程を明らかにする。

第II部では、タウンで制度の中に位置付けられたチベット医学の実践に焦点をあてる。ナツァと呼ばれる病いの治療にあたっての現地の人々間での経験の実態や、治療方法を論じ、制度化されたチベット医学と民間医療の実践との関わりを検討して、身体経験の変容を明らかにする。第3章ではチベット文化圏にタウンを位置付けたうえで、日常

の暮らしを描写し、地域史を概観し中印国境の紛争がもたらした劇的な変化に言及する。1980年代には仏教文化復興運動や政治運動が激化し、タウンの地を「モンユル文化」として再構築する地域ナショナリズムの動きが展開した。制度化されたチベット医学の浸透はこの動きと連動し、病いの経験や意味に大きな変化を生じさせたのである。地元では病いはナツァ、ヌパ、ドーの3種に区分されている。ナツァは飲食物、生活環境、気候などに連動して起こる病い、ヌパは神霊がもたらす祟りや憑依で生じる病い、ドーは人やモノ、環境から毒を齎されることで生じる病いである。本章はナツァの民間治療者の実践である真言吹き治療や柄杓治療について精細な聞き書きを行ない、日常の病いの経験と制度的医療の重なり合いや歴史と身体との繋がりを述べる。第4章では、村でのナツァ治療者の実践を、制度化された医療である診療所でのチベット医学の実践の実態を通して明らかにし、チベット医学や生物医療の制度化の外にある民間医療との部分的繋がりを論じる。治療者とタウンの人々が共有する「古いナツァ」と「新しいナツァ」の区別に着目し、ナツァの経験を通して立ち現れる身体が多層性を論じる。アムチや患者、スタッフの間のモノや実践を介したやりとり、ナツァにおける身体と複数の医療との関係を明らかにする。制度化、文脈、関係、ネットワークなどのキーワードが生の会話を考察につなげる役割を果たしている。

第III部では、チベット医学の制度の外に置かれている医療実践で、ヌパやドーという病

いに関する治療や予防実践を論じる。ヌパは状況に応じて内容が吟味され、対処方法や病いの経験も多様である。ヌパへの対応には仏教僧院で作られる宗教薬（真言を籠める、ルーメン、メンチー）の服用や僧による儀礼が執行され、ドーには一部の村人が調査する民間薬（ドーマン）が使用される。チベット医学や生物医療では治療できない、さまざまな対処方法や独自の薬の服用が試みられる。第5章では、ヌパのひとつとされる神霊ルーの祟りによる病いとこれに対応する医療実践を具体例を通して紹介し、穢れや禁忌の侵犯に対する浄化儀礼の実態を明らかにする。ルーの祟りの発生は、村人の争い、道路建設、国境紛争、開発が大きな要因となっている。タウンの人々は、身体を浄化する香木や供物、祠など具体的なモノを通して環境との循環を構築し、身体の実験はルーと同化して語られる。環境の変化と病いになることをルーを通して経験し、日常でもルーへの配慮を怠らないという。しかし、仏教復興運動や環境保護運動の展開によって、高僧や政治家や社会運動家による「モンユル文化」構築の動きが進み、オールタナティブな実践としてルーは包摂されたり排除されたりするようになったとする。第6章では、憑依と宗教薬を主題として、悪霊の憑依による病い、神降ろしの儀礼、学校での悪霊の憑依の流行、宗教薬のやりとりの実践など、儀礼とモノとの関わりから身体と他者との関係を明らかにする。特に悪霊祓いに関わるラージュカン（クテン）と呼ばれる世襲の神降ろしが、ローカルな巫者から次第に成長して亡命政府のチ

ベット難民の治療に携わるようになる過程は現代の変動と対応して興味深い。第7章では、ドーの事例を検討する。ドーは特定の間人やモノや環境から齎される多様な毒であり、妖術師ドーマが使うという。タウン北西部P地方と西部D地方でのドーマの家系を取り上げて、毒盛りの妖術の実態を論じる。重要な点はP地方はチベット（ツォナ）に、D地方はブータン（タシ・ヤンツェ）に隣接し、かつてはトランス・ヒマラヤ交易の通商路として栄え、多様な余所者と地元が相互交渉する開かれた地域であったという歴史的背景の影響である。聞き書きを通じて、毒盛りによる身体変容と民間薬のやりとり、妖術師と村人との関係を通じて、毒とは何かを明らかにし、悪の実態に迫る。総じて、病いの経験を文脈を通して考察すると、それらが制度（近代）に取って代わられつつある過去の遺物ではなく、現代の暮らしの中で新たな重要性を帯びていることが示される。第6章と第7章の理論的考察には、南アジアでは、「分割可能な人格」が生成され、日常的実践でも儀礼でも人々はさまざまなモノのやりとりを介して身体に内在される行動規範のコードが決定され、モノの流れの中で実体化されるというサブスタンスとコードの理論を援用したうえで、身体が食物や土地との関係だけでなく、薬や神霊、紛争や開発など多様な要因と関連していることを明らかにして、変化と脱構築の過程を動的に描き出す。

終章では、チベット医学の開発とタウンの人々の医療実践を、複数の身体と病い、薬、環境が絡まり合うと指摘して、病いと共に生

きることの意味と経験を総合的に論じた。

本書が評価されるべき点は、伝統と近代、制度的医療と土着医療という二項対立を越えて、「現地の人々の生きられた世界に焦点をあて、病いや治療実践を通していかに制度、医療、身体が関わり合うのか」(p. 21)を多角的に論じたことである。理論的な貢献としては、ヴィヴェイロス・デ・カストロの存在論的研究をさらに深めて、コスモロジーは概念と知識の体系ではなく、人・モノ・言葉の配置を通じて身体を介して感得される生きられた世界であることを実証的に示したことがある。複数の自然と複数の身体との照応を認識の出発点として、生活世界の多角的な諸相を病いを通して描いた試みとして評価したい。

本書の前半の主題はチベット医学の制度化で、1980年代にタワンにはダラムサラの専門組織からチベット人のアムチが派遣されて医療実践が変容し、地元との協働での医学開発プロジェクトが進行した経緯を丹念に描く。制度化を通して地域社会の医療実践の変容や再構築が広い視野から描かれている。後半はタワンの地元の視点に転換し、病いの3分類を示し、チベット医学に包摂されるナツァと、枠組みの外のヌパヤドーに分けて、制度化と制度化以前の関連を明確化した。そしてヌパヤドーに処方する宗教薬や民間薬の重要性を指摘し、薬がもつ豊かな意味の喚起の諸相に注目した。公式化された医療と非公式な諸医療の相互で、病いや治療が新たな文脈で経験され再構築される過程が明らかになった。タワン・モンパはチベット人ではな

い。チベット語は一部の人しか知らず文字も普及していない。モンパの言葉には文字がなく口頭伝承が基本である。<sup>1)</sup> 本書が言語の困難性を越えてコスモロジーを丁寧に現地語の文脈から読みほどこうとする姿勢を高く評価したい。

本書で最も生彩を放つのは魅力的な対話である。個々の語り口が生き生きとして小さな物語の連鎖として読める。時々筆者自身もその中に書き込まれる。タワンの診療室で、アムチと患者と周囲の人々が、チベット語とタワン・モンパ語とヒンディー語が飛び交う中で、次第に症状を確定し治療方法を見つけ出すという場面には本書の主題が凝縮されている。話者と筆者のかかなりの信頼関係がなければこれだけのフィールドワークは出来ない。

問題点としての第一は、本書の「病い」の概念は医療人類学の illness で、社会的文化的に構築される (p. 21) と明記しながらも、対比概念である「疾病」 disease への言及や説明が本文にも注にもない。「病い」と表記して、西欧医学や生物医学の「疾病」とは区別される「病気」であるという医療人類学の見解を積極的に明示する必要があったのではないか。

第二はタワンの人々という一括した括りである。タワン・モンパが考察の主役であることは確かだが、神降ろしのラージュカンはディラン出身で、ドーの妖術師はゼミタンが

---

1) タワンやディランのモンパを水野一晴はチベット人と記述し、チベット語の知識でモンパを解釈しているが誤りである [水野 2012]。

本場である。モンパとはモンユル（南の回廊）の人の意味でチベットの南という位置関係を示すだけである。ゼミタンはパンチェンパで、モンケット話話者のタワン・モンパとは言葉が異なり、ディランはツェンラ話話者でタワンの人々とは言葉が通じない。タワンは巨大な僧院があってチベット仏教の影響が強いが、ディランは仏教徒だが在地信仰が根強い。神降ろしのラージュカンはディラン出身で民間信仰への信頼が基盤にあり、タワンの人々にとっては「よそ者」のゆえに強い呪力を期待され発揮できると考えられたのではないか。

第三はP地方やD地方という記号化された地名である。確かに個人情報の保護は大事であるが、略記号を用いることで、妖術発生の歴史的背景や文化的社会的基盤の探究が曖昧になってしまった。ゴルサムチョルテンが妖術の本場で果たす機能や意味、ルーとの交渉過程（p. 256）の背景にある仏教復興運動の在り方が問われる。チベットとの古い商業ルートとしてP地方は繁栄し、貧富の差が拡大して、嫉妬や怨念による妖術が発生しやすい環境にあったのではないか。魔女伝説の館も近隣にある。場所が特定できないと説得力ある記述は難しい。評者はPやDの現場を知っているがゆえに隔靴搔痒の感に囚われる。

第四は今後の課題であるが、仏教復興運動や政治運動との動態的関連である。T.G. リンポチェ（ツォナ・リンポチェ）やドルジ・カンドゥ等の僧侶政治家の動きや、母語でもないチベット語をボーティ語という名称のも

とに公用語化する運動、<sup>2)</sup>モンユル・ナショナルリズム運動とチベット医学の制度化との連動など、タワンの民間の伝承知は複雑な現代化の中で揺れ動いてきた。タワンは国境紛争地域なので外来者の往来も多く、軍用トラックが日々行き来し軍隊の駐留地もあり、インド平原の文化も否応なく入ってくる。他方、自立化を目指し財政立て直しのために観光化にも乗り出したが、タワン僧院のロープウェイは試運転のみで未使用のまま放置された。大量に流れ込む開発資金と汚職と賄賂が続く。タワンでの変化はグローカリゼーションの典型であり、地域の変容は現代世界を映す鏡でもある。

タワンも含めてアルナーチャル・プラデーシュ州は人類学者にとってやるべき課題が満載の垂涎の地であり、今後のさらなる展開を期待したい。

#### 引用文献

- 水野一晴. 2012. 『神秘の大地, アルナチャル・アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会』昭和堂.  
 脇田道子. 2019. 『モンパーインド・ブータン国境の民』法蔵館.

2) タワン・モンパの歴史・政治・開発の全容に関しては〔脇田 2019〕を参照されたい。